

〈論文〉

古ザクセン語聖書詩 『ヘーリアント』・『創世記』における 間接的話法から直接話法への移行について*

井上 瞬

1. 序

ゲルマン語の一つであり、9世紀から12世紀にドイツ北部を中心として話されていたとされる、古ザクセン語¹で書かれた聖書叙事詩（Bibelepos）である『ヘーリアント』（*Heliand*）並びに『創世記』（*die altsächsische Genesis*）²においては、〈話法〉に関して間接的な話法から直接話法への移行（これ以降、単に「話法の移行」と称す

* 本稿は、京都大学大学院人間・環境学研究科に2020年2月に提出した、修士学位論文に、大幅な加筆修正を行ったものである。なお本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

- 1 当該の言語の呼称には揺れがあり、「古ザクセン語」、「古サクソン語」、「古低地ドイツ語」などの呼称が混在しているが、本論では「古ザクセン語」という呼称で統一する。
- 2 『ヘーリアント』は古ザクセン語の現存するテキストのおよそ80%を構成する文献であるとされる（Sanders (2000:1277)）。本稿においては特記のない場合、両作品からの引用は全て Behaghel/Taeger (1996) に拠る。『ヘーリアント』並びに古ザクセン語『創世記』からの引用の際には丸括弧内にてその行数のみを表示するが、特に後者については行数の前に G. を付す。また、半行の前半並びに後半を a/b を用いて示すこととする。なお、半行の区切り (lat. caesura) を <|> で、行の区切りを <||> で表す場合がある。また、引用文には著者による日本語訳あるいはグロスを必要の範囲内で付すこととする。なお、例文に付すグロスの略号については、Comrie/Haspelmath/Bicke (2015) のものに加えて、次に挙げるものを適宜用いる場合がある。INSTR = 具格、PP = 過去分詞形、SUBJ = 接続法。

る)が見られることが知られてきた³。例えば、次の『ヘーリアント』からの例に見られるようなものがそれに当たる。

- (1) *Thô uuarð sãn aftar thiú uualdandes, ||*
 then.ADV have.IND.3SG.PST soon.ADV after.PREP that.N.INSTR ruler.M.SG.GEN
godes engil cumen | Iosepe te sprâcun ||
 god.M.SG.GEN angel.M.SG.NOM come.PP Joseph.DAT to.PREP speak.INF
sagde im an suuefne |
 say.IND.3SG.PST PRO.3SG.M.DAT in.PREP dream.M.SG.DAT
slâpandium an naht, || bodo drohtines, |
 sleep.PTCP_PRS.SG.M.DAT in.PREP night.F.SG.ACC messenger.M.SG.NOM lord.M.SG.GEN
that that barn godes || slîðmôð cuning |
 that.CONJ the.N.SG.ACC child.N.SG.ACC god.M.SG.GEN cruel.ADJ.M.SG.NOM king.M.SG.NOM
sôkean uuelda, || âhtean is aldres; |
 seek.INF wish.IND.3SG.PST chase.INF his life.N.SG.GEN
'nu scal =tu ine an Aegypteo ||
 now.ADV shall.IND.2SG.PRS =PRO.2SG.NOM PRO.3SG.M.ACC in.PREP Egyptian.M.PL.GEN
land antlêdean | endi undar them liudiun uuesan ||
 land.N.SG.ACC lead_away.INF and.CONJ among.PREP the.M.PL.DAT people.M.PL.DAT be.INF
that thiú godes barnu |
 with.PREP the.N.SG.INSTR god.M.SG.GEN child.N.SG.INSTR
endi mid theru gôdan thiornan, || [...]' (699b-707b)
 and.CONJ with.PREP the.F.SG.DAT good.ADJ.F.SG.DAT maiden.F.SG.DAT

「それから、その後すぐに、統べる者の、神の天使が、ヨゼフに対して話に来た、〔そして〕彼に夢の中で言った、眠っている〔男〕に夜に、主の使者が〔言った〕、その良き子供を、残酷な王が、求めんとしている、彼〔＝その良き子供〕の命を狙わん〔としている〕、『さて、あなたは彼をエジプト人たちの、土地へ連れて行く運命にあるのだ、そしてその人々のうちである〔運命にある〕、その良き子供と共に、そしてその良き乙女と共に（後略）』」

このような表現形式は、今日の読者にとっては幾分奇異なものに思われるものであ

3 Vgl. Holthausen (1921: § 546), 高橋 (1994:197).

り、先行研究において時に言及がなされてきた。しかしながら、他の言語現象に比べて研究が少ないほか、現代語の作品に比べて古語の作品を対象とする話法の問題は取り扱われることが少なく、一般に関心が低かったように思われる。本稿では、このような話法の移行について、『ヘーリアント』と古ザクセン語『創世記』を対象として客観的基準に基づく分類を行い、その使用理由について考察を行う。

2. 話法の定義と現代語における話法

話法のうち基本的と考えられるものには、〈直接話法〉と〈間接話法〉の二形式が挙げられよう。現代語を念頭に置いた二形式の話法の定義として、例えば次のようなものがある。

- (2) 話し手が別の話し手が言っていることを全く変わらない形で伝えた場合、それを直接話法 (direct speech) と言う。 (アロット (2014:98))
- (3) 一言一句違わずに報告しているとは (明示的にも非明示的にも) 言わずに、別の話し手が言ったこと (あるいは、話し手自身が別の時に言ったこと) について報告する場合、これを間接話法 (indirect speech) と言う。 (アロット (2014:155-6))

話法に関して異なった様相を見せる現代語として、現代英語、新高ドイツ語、現代ロシア語を例にとると、直接話法と間接話法は次のように例示することができる。

(4) 現代英語

a. *He said, 'I love her now.'*

b. *He said (that) he loved her then.*

(5) 新高ドイツ語 (Wöllstein and Dudenredaktion (2016:535))⁴

a. *Anna schreibt aus Rom: »Ich bin hier sehr glücklich!«*

Anna writes from Rome I be.IND.1SG.PRS here very happy

'Anna writes from Rome, "I am very happy here!'"

4 なお、新高ドイツ語においては、間接話法の従属節中の動詞が直接法現在、接続法第I式 (接続法現在)、接続法第II式 (接続法過去) のいずれかを取り得る。この例では、接続法第I式を取っているが、これらのうちいずれを選択するかは、話者の伝達内容に対する事実認定に左右されるとされる。

b. *Anna schreibt aus Rom, sie sei dort sehr glücklich.*
 Anna writes from Rome she be.SUBJ.3SG.PRS here very happy
 ‘Ann writes from Rome that she is very happy there.’

(6) 現代ロシア語 (Institut russkogo jazyka (1980:486))

a. *Otec obeščal detjam: «Ja podarju vam ètu knigu».*
 father promised children I give.1SG.PRS you this book
 ‘The father promised his children, “I will give you this book.”’

b. *Otec obeščal detjam, čto (on) podarit im ètu knigu.*
 father promised children that.CONJ he give.3SG.PRS them this book
 ‘The father promised his children that he would give them this book’

ここで話を簡単にするために、(4b), (5b), (6b) の間接話法で書かれた文が、(4a), (5a), (6a) の直接話法で書かれた文を書き換えたものと仮に看做すと、間接話法を用いる際にいわゆる〈時制の一致〉や従属節における叙法の変化が言語ごとに見られる場合と見られない場合があるが、基本的に人称や時間ないしは場所の直示の変化はあることがわかる。

また、直接話法・間接話法のいずれも基本的に二つの部分に分けられ得る。すなわち、発話の行為者ないしは聴衆が示される〈導入部〉と、伝達内容の叙述が行われる〈再現部〉である。上掲の現代英語の例で言えば、“he said” が導入部、直接話法の引用符で囲まれた部分あるいは間接話法の従属節 (ne. content clause) がそれぞれ再現部となる。またこの導入部は概して必ずしもそれらの話法の前半に置かれて、再現部を文字通り導入する訳ではなく、再現部の途中に割り込んだり、再現部に後置されたりする。また、これらの話法の他に、例えば動詞の不定形を用いて発話を間接的に再現するものがある。例えば次の現代英語の例を見られたい。

- (7) a. ‘Have another apple,’ Carol suggested (to me).
 b. Carol suggested that I (should) have another apple.
 c. Carol asked me to have another apple. (Quirk et al. (1985:1030))

この (7a) の直接話法の文に対応する間接話法は (7b) のように例示されるが、(7c) のように同内容の文を、場合によっては対格付き不定詞を用いて表すことができる⁵。

5 この NRSA と間接話法は、いずれも直接話法とは異なってその話者によって再現部が再構成

この対格付き不定詞のものを Leech/Short (2013:259—260) は “Narrative report of speech acts” (NRSA)⁶ と称し、「間接話法よりもさらに間接的 (“more indirect than indirect speech”）」なものとしている。

さて、現代語の話法については、新高ドイツ語を例に挙げると、直接話法と間接話法を基本として次のような話法の形式がある（なお以下の5つは、鈴木 (2005:20-1) の記述による）。

1. 直接話法

K. fragte sich „Wo sind wir?“
PN asked himself where be.IND.PRS.PL we

2. 間接話法

K. fragte sich, wo sie seien.
PN asked himself where they be.SUBJ.PRS.PL

3. 自由直接話法

Wo sind wir?
where be.IND.PRS.PL we

4. 導入部欠如間接話法⁷

Wo seien wir?
where be.SUBJ.PRS.PL we

5. 自由間接話法（体験話法）

Wo waren sie?
where be.IND.PST.PL they

古ザクセン語についても同様の話法の形式の存在を仮に想定すると、初めに挙げた (1) は間接話法と導入部欠如直接話法の組み合わせという解釈ができる。ここで問題となるのは、古ザクセン語においては直接話法の再現部が単体で生じ得るのか（つまり自由直接話法が存在し得るのか）、直接話法の再現部に先行する間接話法は直接話法の導入部とどのように異なるのか、という点である。本論はこれらの問題について取り扱うものである。なお、とりわけ『ヘーリアント』については、『タツィアーン』

されている点で類似している。

6 この術語の日本語訳は「発話行為の語りによる伝達」（リーチ/ショート (2003:240—241)）である。本論ではこれ以降、略称の NRSA を用いる。

7 なお、この形式は現代英語に存在しない。

の影響下において、いわば『聖書』を自由翻訳されたものと考えられる⁸ ことに加え、『ヘーリアント』と古ザクセン語『創世記』のいずれも、中世に書かれたものであることには留意する必要があると考えられる。さらに、古ザクセン語聖書詩のいずれの写本においても、今日的な引用符は使用されていないことには、留意する必要がある。

3. 先行研究

本節では、『ヘーリアント』における話法の移行に関して取り扱った先行研究を概観する。これには、古ゲルマン詩全般を扱った Heusler (1902)、古ザクセン語における話法を扱った Behaghel (1876)、『ヘーリアント』という作品の芸術的側面を論じた Berron (1939)、そして『ヘーリアント』における話法の移行を中心的に取り扱った Widmer (2005) が含まれる。

3.1. Behaghel (1876)

Behaghel (1876: § 5) は、『ヘーリアント』における叙法の記述を行うに当たって、話法についても記述を行っている。その中で、中世のゲルマン語において間接話法の副文の一部が直接話法の再現部として遊離することがしばしば見られるものの、『ヘーリアント』においてはその例が少ない旨を述べている。この Behaghel (1876: § 5) の分類は、概ね次の通りに示される。

- I. 発話の主文が〔間接話法の導入部に〕従属的である場合
 - i. 間接話法の従属節から、それと統一体となっている構成要素を〔直接話法の再現部として〕出す場合
 - ii. 〔間接話法の導入部に〕従属している〔発話の〕主文に続く〔発話の〕主文が〔直接話法の再現部として〕独立していて、しかもそれが〔間接話法の再現部の〕

8 例えば Behaghel/Taeger (1996) には、ページ上部に対応する『タツィアーン』の箇所が記されている (Vgl. Behaghel/Taeger (1996: XLI-XLII))。『タツィアーン』は『新約聖書』の「四福音書」の内容を総合した「調和福音書」である。なお、ラテン語とその訳文の古高ドイツ語が Bilingue (行対応の対訳形式) で配置されている写本として、9世紀の中頃の成立 (Vgl. Masser (1994: 27)) と見られる Codex Sangallensis 56 がある。この Cod. Sang. 56 のラテン語部分は、『ウルガタ訳聖書』に基づく「新約聖書」の写本である Codex Fuldensis によるものである (Vgl. Masser (1994: 30))。

- A) 主張文に接続する場合
 - B) 疑問文に接続する場合
 - C) 要求文に接続する場合
- iii. 〔間接話法の導入部に〕従属的な〔発話の〕主文の〔従属関係にある〕副文が〔直接話法の再現部として〕自立した〔節である〕場合で〔直接話法の再現部の節が〕
- A) 主張文で終わる場合
 - B) 疑問文で終わる場合
 - C) 要求文で終わる場合
- iv. 間接話法の再現部における副文の途中から、直接話法の再現部にとって変わられる場合
- II. 〔発話の〕副文が〔間接話法の導入部に〕従属的であり、〔発話の〕主文が〔直接話法の再現部として〕自立的である場合

この分類は、発話（すなわち直接話法の再現部）の冒頭部分に着目した分類である。これによって、古ザクセン語においては間接話法の再現部の一部分が、それが語句単位か節単位か文単位かを問わず、直接話法の再現部として分離され得ると Behaghel は考えていることがわかる。一方で、Behaghel は直接話法の再現部の一部が間接話法の再現部の後に現れた場合に、直接話法の導入部が現れるか否かについては注目していない。

3.2. Berron (1939)

Berron (1939:17) は、古英詩に比べて『ヘーリアント』においてより多くの間接話法が見られることを挙げており、直接話法と間接話法のそれぞれの行数を述べている。Berron によれば、キリストによる長い発話を除いた場合 1499.5 行、含んだ場合 2609.5 行、直接話法が見られるのに対して、間接話法は 308 行しか見られず、その比は 5:1 である⁹としている。加えて、135 例の直接話法、64 例の間接話法、85 例の間接話法から直接話法への移行（Berron の用語では *Spaltung* 「分裂」）が見られるとしており、こうした分裂が多く見られることを示している。Berron (1939:23-24) はまた、『ヘーリアント』がラテン語『タツィアーン』とは異なる話法を採用している

9 これは、Berron のいう「キリストによる長い発話」を除いた数値であり、含んだ場合は 8.5:1 程度になる。

箇所をいくつか例示している。さらに、Berron (1939) はこうした分裂について、文体的な説明をも試みている。例えば Berron (1939:26-7) は、「八福」の場面において、最初の三つは分裂で、中間の三つは直接話法の再現部で、最後の二つは再び分裂で、キリストの発話が表現されていることについて、中間の三つが山場となるような形式を取ったと主張している。

3.3. Widmer (2005)

『ヘーリアント』における間接話法から直接話法への移行を中心的に扱った研究として、Widmer (2005) がある。このような移行を Widmer (2005:57) は *Slipping* と呼称し、「文脈の状況の唐突な交替を伴う間接話法から直接話法への突然の移行 („Der unvermittelte Übergang von indirekter in direkte Rede mit dem abrupten Wechsel des Bezugsrahmens“)」と定義している。また Widmer (2005: 61-63) は *Slipping* について、「中断」(Bruchstelle; = *Slipping* の起きている箇所) の統語的な環境に着目して、次のような類型区分を行なっている。

1. 中断が2つの文の間にある場合
 - A) 間接話法の終わりと共に従属節が統語的に終わり、直接話法が新たな主節で続く場合
 - B) そうした結び付き〔= 間接話法の終わりと共に統語的に従属節が終わり、新たな直接話法の文が始まるもの〕における新たな直接話法の文が、従属節で始まる場合
2. 一文の内部に中断がある場合
 - A) 母体たる文 (Matrixsatz) が間接話法で、その従属節〔= 接続詞節・関係詞節〕が直接話法で現れる場合
 - B) 従属節が間接話法で、その母体たる文が直接話法で見られる場合
3. 中断が節の内部にある場合

これらの類型毎の用例数は、Widmer (2005:63) によれば、1. が 87 例、2. が 21 例、3. が 1 例である。この合計 109 例について Widmer (2005:79) はその箇所を示している¹⁰。

10 具体的には次のとおりである。

116, 165, 211, 318, 397, 521, 499, 554, 621, 704, 724, 771, 878, 912, 975, 997, 1102, 1112,

加えて Widmer (2005:70) は、次の5つを語法の判断基準として挙げている。

- A) 人称の直示の変化
- B) 時間の直示の変化
- C) 叙法の変化
- D) 談話の小辞 *nu* の使用
- E) *quað(un)* ‘he/she/they said’ の使用

とりわけ、基準の D) に関して、Widmer (2005:67–8) は、古高ドイツ語の翻訳作品においてラテン語の *quia* に相当する *uuanta*, *bithiu*, *bithiu uuanta* 「何故なら」が、直接語法の導入部として用いられ¹¹、それが『ヘーリアント』の *nu* の「中断」での使用を想起させる場合があるとしている。

- (8) *Alle gisprâkun, || that he uuâri uuirdig | uuelono gehuilikes, ||*
everyone spoke that.CONJ he be.SUBJ.3SG.PST worthy possession.GEN each.GEN
that he erðriki | êgan môsti || uuidene uueroldstól, | ‘nu he sulic
that.CONJ he earthly_realm posses may.SUBJ.3SG.PST wide throne now he such
geuuit habad, || sô grôte craft mid gode.’ (2878b–82a)
wisdom has so great power with god

「すべての者が語った、彼は皆の財産に価値ある者になるであろうと、そして彼はこの地上の王国を所有することになるだろうと、広い統治者の王座を〔所有することになるだろうと〕、『さて彼はそのような知識を有している、そしてそのように強大な力を神と共に〔有している〕。』」

1141, 1159, 1302, 1305, 1307, 1317, 1321, 1845, 2052, 2097, 2129, 2195, 2249, 2253, 2544, 2556, 2626, 2652, 2714, 2750, 2823, 2829, 2833, 2844, 2881, 2927, 2952, 2989, 3149, 3157, 3166, 3190, 3202, 3299, 3307, 3328, 3390, 3413, 3416, 3399 [sic], 3442, 3520, 3522, 3563, 3726, 3743, 3771, 3812, 3820, 3913, 3828, 3850, 3931, 3978, 4006, 4055, 4092, 4419, 4473, 4481, 4533, 4617, 4705, 4841, 4844, 4884, 4964, 4973, 4983, 5086, 5158, 5182, 5184, 5240, 5330, 5342, 5376, 5412, 5456, 5478, 5483, 5520, 5542, 5818, 5838, 5851, 5883, 5923, 5934, 5953, 5965. (Widmer (2005:79))

ただし、どの箇所がいずれの類型に属しているかについては、記されていない。

- 11 しかし、Widmer 自身はそのような例を古高ドイツ語から一切挙げていない。おそらく、Dittmer/Dittmer (1998:127–8) に挙げられているようなものを想定しているものと思われるが、詳細は定かではない。

さらに、Widmer (2005) は教会の礼拝に用いられたものとの関係を考察している。

3.5. 先行研究の問題

先行研究についてはいくつかの問題があるが、第一には間接的な話法である NRSA にはあまり注意が払われていないことが挙げられる。また、直接話法の導入部の一環である *quād(un) he/sie* の取り扱いについても、その存在自体を Behaghel (1876: § 5) は無視しているなど問題が見られる。また、Berron (1939) による文体的な説明も客観性を欠いているように思われる。例えば先に触れた「八福」の場面に関する説明については、確かに作者による話法の選択は意図的であると考えざるを得ないが、Berron の主張するような直接話法の再現部の寡多と場の盛り上がりとの関係性は必ずしも明白ではない。なお、Widmer (2005:70) は *nu* について、とりわけ直接話法の再現部の開始部分に現れる例を挙げているが、そのような *nu* が用いられる場合は、*Slipping* の用例のうちのわずか9例（具体的には、521, 704, 724, 771, 1141, 2129, 2881, 2927, 4419）に過ぎず、Widmer が挙げる例の 8.26% 程度に過ぎないために、話法の移行の開始部分の判断には有用であるとは言えない。ただ、副詞 *nu* 自体は多くが直接話法の再現部中に現れるものであるために、判断基準の一つとして考えることに一定の妥当性があると考えられる。しかし、Widmer (2005) の *Slipping* の判断そのものに問題があると言わざるを得ない。Widmer (2005:79) は *Slipping* の生じている箇所として 109 例を挙げているものの、6 例 (4092, 2652, 3307, 3801, 5883, 5953) においては間接話法が直接話法の前に現れておらず、1 例 (3416) においては間接話法が直接話法の前ではなく後に現れており、合計 7 例 (全体の 6.42% に相当) の判断に疑問が残る。このように、Widmer (2005) は *Slipping* について取り扱っているものの、その判断基準並びに判断そのものに議論の余地があると言えよう。また、Widmer (2005:65) は M 写本と C 写本の動詞の叙法が異なるために、直接話法の再現部の開始部にずれの生ずる例を挙げているものの、その箇所の *Slipping* 自体は存在することから、Widmer が *Slipping* の分類において直接話法の再現部の開始部分に着目していること自体に、どの程度妥当性があるのかという疑問が生じるものとなっている。

先行研究全般に言えることとして、話法の移行が取り扱われた文献が極めて限られていること、話法の移行の中でも NRSA から直接話法への移行は間接話法から直接話法への移行の場合に比べて軽視されてきたこと、『ヘーリアント』と同ジャンルであり、古ザクセン語においてそれに次いで二番目の長さの文献である、古ザクセン語

『創世記』は取り扱われてこなかったことが挙げられる。また、このような語法の移行について、直接語法の再現部のとりわけ冒頭部分についての分類は行われて来たものの、直接語法の再現部に伴われるものが何であるかに着目した分類は行われて来なかった。加えて、先行研究においては、『ヘーリアント』の作者が参考としたと考えられる『タツィアーン』などの影響については、Berron (1939) を含めても語法の移行の場合に限っては十分に考慮されていないように見受けられる。従って、改めて直接語法の再現部に伴われるものに関して客観的区分を策定し、それに基づいて語法の移行を分類し、その使用理由をあらためて探る必要がある。

4. 分析

4.1. 分類基準

『ヘーリアント』¹² 並びに古ザクセン語『創世記』においては、基本的に第三者視点で物語が進められるため、三人称の過去時制の文が地の文である。それゆえに、三人称主語の現在時制のもの一人称・二人称主語の文が基本的に直接語法の再現部として考えることができる。しかしながら、作者が一人称主語として現れる表現¹³ が例外的に直接語法の再現部とは考えられないため、これらについては除外することとする。また、呼びかけ表現や間投詞を含むもの¹⁴ については、直接語法の再現部の可能性を考慮する必要がある。さらに、*quad(un) he/sie* の類の導入部（これ以降は *kwap*

12 『ヘーリアント』の写本としては、M 写本と C 写本の二つの代表的な写本に加えて、V 写本、P 写本、S 写本、L 写本の 4 つの断片の存在が知られている。Behaghel/Taeger (1994) は、21 世紀に発見された L 写本以外のすべての写本に基づき編集されている。

13 例えば、< Adv. + gifragn ik that... > (「そうして私が聞いたところによると」という構文がある。この構文は『ヘーリアント』において 13 例見られ、そのうち 5 例 (288b, 1020a, 2621a, 3780a, 4452a) は *so* ‘so, thus, then’ を、2 例 (367b, 3036b) は *thar* ‘there, thereafter, then’ を、6 例 (510b, 630a, 3347b, 3883a, 3964a, 4065a) は *tho* ‘then, now, at that time’ を、それぞれ伴っている。同様の構文は、古ザクセン語『創世記』においては見られないものの、類似のものが古ゲルマン語の韻文作品、例えば古英詩の『ベオウルフ』、『アンドレアス』、古高独詩『ヒルデブラントの歌』などで見られる。こうした構文は明らかに定式化したものであると考えられ、Vilmar (1845:3) は „die altepische formel“ (「古叙事詩的慣用表現」)、Wolf (1995:73, n44) は „Rhapsodenformel“ (「叙事詩的慣用表現」とし、石川 (2002:192) もこれについて「口承伝承に特有の表現」と述べている。これ以外にも、例えば 3619a 以降などに作者が一人称単数の *ik* として現れている。

14 例えば、*fró min* (「我が主よ」) や、*uuela* (「見よ」)、*huat* (「嗚呼」) などがそれに当たる。Vgl. Sehrt (1966), Tiefenbach (2010).

と呼称する)の周囲や人称・時制の直示あるいは叙法の変化が見られる箇所は、先に見た Widmer (2005) らと同様に、直接話法の再現部として判断する必要があると考えられる。なお、これ以降の議論においては簡便のために、基本的に Behaghel/Taeger (1996) の本文に依拠して行うため、各写本間の異同についてはあくまでも部分的な取り扱いに留める。

4.2. 話法の移行の類型区分

『ヘーリアント』並びに古ザクセン語『創世記』における直接話法の再現部については、(A) *kwap* 型でない導入部 (これ以降単に〈非 *kwap* 型導入部〉と呼称) が伴われているか、(B) *kwap* が後続ないしは挿入されているか、(C) 間接的な話法 (すなわち間接話法並びに *NRSA*) が先行しているか、の三点から、計7類型への区分が可能である。ここではそれぞれの類型について一例ずつ挙げることにする。なお *kwap* は下線で、非 *kwap* 型導入部と間接的な話法の導入部における発話動詞は太字で、それぞれ強調する。

(9) 類型 A : 非 *kwap* 型導入部 + 直接話法の再現部 (*kwap* あり)

*Thô uuið is drohtin **sprak** || Simon Petrus: | 'ni thunkid mi thit sômi thing',*
 then against his ruler.SG.M.ACC spoke S.P. not seems me this proper thing
quað he, || 'frô mín the gôdo, | that thu mine fôti thuahes ||
 said he lord my the good that.CONJ you.SG.NOM my feet wash.SUBJ.2SG.PRES
mid them thînun hêlagun handun.' (4507b-10a)
 with that your holy hands

「それから彼の統治者 (= キリスト) に対して、シモン・ペトルスは話した、『私には適切なことだと思えない』、と彼は言った、『我が良き主よ、あなたが私の足を洗うようなことは、そのあなたの聖なる手によって。』」

(10) 類型 A' : 非 *kwap* 型導入部 + 直接話法の再現部 (*kwap* なし)

*Sô quâmun gangan || is hagastoldos te hûse, | iro hêrren **sagdun** || thegnos*
 so came go.INF his young_warriors to house their lord.DAT said men
iro thiodne | thrîstion uuordon: || 'huat, thu sâidos hluttar corn, |
 their ruler.DAT bold words.DAT lo you.SG.NOM sow.IND.2SG.PST pure corn.ACC
hêrro thie guodo, || ênfald an thînon accar: | nu ni gisihit ênig erlo
 lord.NOM the good simple.ACC in your field now not sees each noblemen.GEN
than mêt || uueodes uuahsan. | Huî mohta that giuuerðan so?' (2547b-52b)

than more weeds grow.INF how could that happen.INF so

「そしてやって来た、彼の若い戦士たちが家へと、〔また〕彼らの主へ言った、男たちは彼らの統治者へ、大胆な言葉で、『見よ、あなたは純粋な穀物の種を蒔いた、良き主は、混じり気のない物をあなたの土地に〔蒔いた〕。さて各々の貴族たちは何も見ていない、ただ種子の成長を除いて。何故そのようなことが起こり得るのか。』

(11) 類型 B : 間接語法 + 直接語法の再現部 (*kwap* あり)

[...] *gisâhun thar mahtigna || godes engil cuman, | the im tegegnes sprac, ||*
 saw there mighty.ACC god's angel.ACC come who them towards spoke
hêt that im thea uuardos | uuiht ne antdredin || lêdes fon them liohta: |
 commanded that.CONJ them the guardians at_all not fear evil's of the light
'ic scal eu', quad he, 'liobora thing, || suïdo uuârlico | uuilleon seggean, ||
 I shall you said he nicer thing.ACC very truly pleasure.ACC speak_of
cûðean craft mikil: [...] (394b-9a)
 make_known power great

「(前略) 彼らは神の力ある天使がやってくるのを見た、〔そして天使たちは〕彼らに話しかけ、命じたことにはその守護者たちに全く光のうちの邪悪なるものを恐れないようにと。『私はあなた方に』と彼は言った、『より良い物事について〔話し〕、心より、喜びについて話し、大いなる力を知らしめることになっている。』(後略)」

(12) 類型 B' : 間接語法 + 直接語法の再現部 (*kwap* なし)

Skerida im thò te uuïtea, | that he ni mahte ênig uuord sprekan, ||
 commanded him then as penalty that.CONJ he not may.IND.3SG.PST any word speak
gimahlien mid is mùðu, | 'êr than thi magu uuirðid, || fon thînero aldero idis |
 talk with his mouth until the son becomes by this old woman
erl afôdit, || kindiung giboran | cunnies gôdes, || uuânnum te thesero uueroldi. [...]
 boy give_birth.PP young man born kin's good bright to this world (164a-170a)¹⁵
 「〔使者は〕彼にそのとき罰として命じたのだ、彼が一言も話せぬように、彼の口で語り得ぬように、『その子が、この年老いた女性から、その男の子が産まれるまで、若き男が生を享けるまで、良き血筋の、輝かしい者がこの世界

15 この例において、接続法ではなく直接法が間接語法の再現部において用いられており、叙法の変化は語法の移行の判定において必ずしも決定的な要素ではないことがわかる。

へ〔生を享けるまで〕。(後略)』

- (13) 類型 C : NRSA + 直接話法の再現部 (*kwap* あり)

Tho he sie sôkien hêt, || thea gumon Hierusalem: | 'sô gi than
Then he them visit.INF commanded the men.ACC Jerusalem 'when you.PL then
ganagn kumad,' quað he, || 'an thea burg innan [...]' (4532b-4a)
go.INF come.IND.2PL.PRS said he in the mountain inside

「そして彼は彼らに命じた、その男たちに、エルサレムを訪れるように〔命じた〕、『あなたたちが行ったときに』、と彼は言った、『その山の中へと〔行ったときに〕、(後略)』

- (14) 類型 C' : NRSA + 直接話法の再現部 (*kwap* なし)

Hêt he thò forð dragan || te scauonne the scattos, | 'the gi sculdige
commanded he then forth carry to look at the coins whom you.PL responsible
sind || an that geld geben.' (3819b-21a)
are in the payment give

「彼はそこで前に運ぶことを命じた、硬貨を目にするために、『あなた方が、支払いで渡す責任のある〔硬貨を運ぶように〕』

- (15) 類型 D : (非 *kwap* 型導入部・間接的語法なし) 直接話法の再現部 (*kwap* あり)

[...] *them thar quâmun at êrist tuo: || 'uui quâmun hier an morgana,' quaðun sia,*
them.DAT there came first two.NOM we came here in morning said they
'endi tholodun hier manag te dage || arabiduuero, | huilon unmet hêt, ||
and suffered here many today hard works' time.PL.DAT extraordinary heat
scînandia sunna: [...]' (3435b-40a)
shining sun

「(前略) 彼らのところに二人〔の人々〕が最初にそこへやって来た、『我々はこの場所に〔今日の〕朝にやって来た』と彼らは言った、『そしてここで今日多くのことに苛まれた、〔多くの〕労役に、しばらくの間尋常ならざる熱に、照らし輝く太陽に。』

これらの類型の概略は次のように表せる。

表 1：話法の類型

	導入部		間接的話法		全体		〔『創世記』のみ〕	
	<i>kwap</i>	非 <i>kwap</i> 型	間接話法	NRSA	合計	比	合計	比
A	✓	✓			114	44.71%	9	75.00%
A'		✓			26	10.20%	1	8.33%
B	✓		✓		32	12.55%	2	16.67%
B'			✓		61	23.92%	0	0.00%
C	✓			✓	6	2.35%	0	0.00%
C'				✓	3	1.18%	0	0.00%
D	✓				13	5.10%	0	0.00%
計					255	—	12	—

この表中の網掛けされた類型 B, B', C, C' が、話法の移行にあたるものである。上の表 1 は Behaghel/Taeger (1996) の本文に基づく数値であるが、複数の写本がある『ヘーリアント』に関しては、*kwap* の有無が同じ箇所であっても写本ごとに異なる場合がある。したがって次の表に示されるように、A/A', B/B', C/C' のいずれの類型とも解釈し得るような箇所がある。

表 2：*kwap* の写本ごとの有無と話法の移行の類型¹⁶

類型	箇所	合計
A/A'	825b (M / C), 1597b (C / M), 2419b (C / M), 2432b (C / M), 3052a (M / C), 3057a (C / M), 3948b (C / M), 4516b (C / M), 4638a (C / M)	9
B/B'	397b (M, C / S), 4973a (C / M)	2
C/C'	3203a (M / C)	1
合計	—————	12

現在、*kwap* は韻律の分析上で考慮外とされる¹⁷が、このような異同の存在と符合する。なお、これらの異同を考慮すると話法の移行は 102 例見られるが、そのうちお

16 括弧内の左側に太字で示された写本でのみ *kwap* が見られる。Vgl. Russom (1998: 138).

17 Vgl. Hofmann (1991, I:50, 90, 96), Russom (1998: 138), Suzuki (2004:27–28).

よそ6割で *kwap* が用いられていない。

5. 考察

本節では古ザクセン語聖書詩における話法の移行について、考察を行う。表2に見られるように、*kwap* のある直接話法の再現部の現れる用例が、*kwap* のない場合よりも多いが、移行を伴う場合に限ると状況が逆転し、*kwap* のある直接話法の再現部の現れる用例が、*kwap* のない場合よりも少なくなる。また、直接話法の再現部のみ（自由直接話法）として考えられるような、類型Dから *kwap* を無くしたようなものは、全く見られない。言い換えれば、古ザクセン語聖書詩において、直接話法の再現部は、非 *kwap* 型導入部、*kwap*、間接話法、NRSA のいずれかを必ず伴う必要があったということである。ここから、二つの可能性が想定される。一つは、古ザクセン語聖書詩の作者は間接的な話法を伴わない直接話法の再現部に *kwap* を必ず付し、写字生（scribe）たちがそれを保持したという可能性である。もう一つは、複数の異なる写本において共通して見られる現象のために、一つ目の可能性よりもその蓋然性は極めて低いと考えられるが、作者は間接的な話法を伴わない直接話法の再現部に *kwap* を付していなかったが、写字生が統一して付す形にしたという可能性である。

また、特定の直接話法の再現部が現れる箇所、*kwap* とそれ以外の非 *kwap* 型導入部ないしは間接的話法は共起し得るが、非 *kwap* 型導入部と間接的話法は共起し得ないことがわかる。従って、*kwap* は直接話法の導入部としては、ある意味で特殊なものであると考えられる。これは、単に先で述べたような韻律上の例外であるということのみならず、非 *kwap* 型導入部と間接的話法が *kwap* に比べて主語や動詞などの選択の自由がある上に、*kwap* のような二語からなる短い形式でないということからもわかるように、*kwap* の表している発話行為の内容が非 *kwap* 型導入部と間接的話法に比べて非常に単純であるということからも明らかである。しかしながら、*kwap* の使用そのものは完全に選択的であるわけではないことは、先に述べたとおりである。逆に言えば、間接的な話法と非 *kwap* 型導入部は、発話内容の間接的な再現を伴うことを除いては、発話者の明示、多様な動詞の選択、あるいは様態の詳細な叙述が可能であるという点で一致しており、*frágon* 「尋ねる」のように間接的な話法と非 *kwap* 型導入部のいずれにも用いられる動詞があることから、話法の推移は非 *kwap* 型導入部を伴う直接話法と類似のものとして考えることができるのである。

さて、間接的な話法が直接話法の再現部の前に現れる四類型（B, B', C, C'）について、その直接話法の再現部の冒頭部分の形式別の概略は、次の表のようにまとめら

れる¹⁸。

表 3：四類型の直接話し法の再現部の冒頭について¹⁹

		類型 B		類型 B'		類型 C		類型 C'	
新たな文	下記以外	22	70.97%	24	38.71%	4	66.70%	1	33.30%
	<i>nu</i> で始まる文	1	3.23%	6	9.68%	1	16.70%	0	0%
	後ろの節への 従属節	3	9.68%	4	6.45%	1	16.70%	0	0%
前の節と並列される 接続詞節		1	3.23%	7	11.29%	0	0%	0	0%
前の節に従属する 接続詞節		3	9.68%	10	16.13%	0	0%	0	0%
前の節に先行詞を有する 関係詞節		1	3.23%	11	17.74%	0	0%	2	66.70%
合計		31	———	62	———	6	———	3	———

なお類型 C/C' については、NRSA の発話行為動詞として *hêtan* (「命ずる」) のみがい用いられており²⁰、その用例数が他の類型に比べて非常に少ないために、類型 B/B' の亜種として考えることができるであろう。これら四類型の内でも、直接話し法の再現部が前の節に並列される、ないしは、従属する節から始まるもの(すなわち新たな文で始まらないようなもの)に着目すると、*kwap* を伴うような類型(類型 B, C)と *kwap* を伴わないような類型(類型 B', C')を比較した場合に、後者の場合が絶対的にも相対的にも多く、前者が 5 例(全 37 例の 13.51% に相当)であるのに対し、後者は 30 例(全 65 例の 46.15% に相当)である。写本に現代的な引用符が用いられていない古ザクセン語聖書詩においては、その前後に直接話し法の再現部が想定される *kwap*

18 なおこれは、あくまでも Behaghel/Taeger (1996) の本文に依拠したものであるために、特定の写本に着目した場合には数値が異なり得る。

19 ちなみに、移行を伴わない単純な直接話し法の類型 D については、全 13 例のうち、2 例が *nu* で始まる新たな文、11 例が新たな文である。なお、類型 B, B', C, C', D に属する諸例に関する直接話し法の再現部の開始部分ならびに発話者の詳細(ただし、Behaghel/Taeger (1996) の本文に依拠したものは、本稿末尾の付録を参照されたい)。

20 NRSA の発話行為動詞は、*hêtan* (「命ずる」) 以外には (*gi-*)*hòrian* (「聞く」) が用いられる(Vgl. Behaghel (1897: § 334)) が、この動詞については話し法の移行の際に用いられていない。

は、現代的な引用符の機能を代替する可能性がある要素であると考えられるために、こうした状況が見られるというのは、その原因については不明であるものの、一定程度の注目に値するものであると言えるであろう。

さて、全七類型について、何故作者ないしは写字生ら²¹がその選択を行ったかについて、若干の考察を行うこととしたい。すでに述べたように、*kwap*の選択については韻律の影響を受けないことに加え、古ザクセン語聖書詩は共に『聖書』からの翻訳文学であるとは言え、一種の自由翻訳の類であると考えられる²²が、特に『ヘーリアント』については、ラテン語『タツィアーン』のみならず、バーダ、アルクイン、ラバヌス・マウルスらの注釈 (Vgl. Migne 1862, 1863, 1864) の影響を受けていることも知られている²³。そこで、『ヘーリアント』におけるいくつかの話法の移行の見られる箇所について、該当するラテン語『タツィアーン』並びに、その箇所への影響が示唆されている注釈とともに挙げ、『ヘーリアント』の作者がそれらの影響により、話法の移行を含む類型を選択したのかを見たい。

(16) a. [...] *he grôte aftar thiu || Simon Petrusen, | quad that he uuâri gisendid*
 he addressed thereafter Simon_Petrus.ACC said that he be.SUBJ.3SG.PST sent

- 21 とりわけ *kwap* の有無の選択については、写字生らによるものが一定程度あったと考えるのが妥当であるのは、表2で示した写本毎の *kwap* の存否の差異からも明白である。
- 22 特に『ヘーリアント』においては、大幅に元の『聖書』の記述が敷衍されているような箇所も見られる。例えば「ルカの福音書」原文では一文で書かれた記述が、『ヘーリアント』の第2章では10行以上に渡って記述されている箇所がある (Vgl. 石川 (2002: 96))。古ザクセン語聖書詩が自由翻訳であるのは、同じく聖書からの翻訳文学である古高ドイツ語『タツィアーン』の場合とは対照的であって、そのことは古ザクセン語聖書詩が古ゲルマン叙事詩の形式で書かれていることから窺える。また、『ヘーリアント』の散文の序においては、次のように書かれている。

[...] interpretando more poetico satis faceta eloquentia perduxit. Quod opus tam lucide tamque eleganter iuxta idioma illius linguæ composuit, ut audientibus ac intelligentibus non minimam sui decoris dulcedinem præstet. (Behaghel/Taeger 1996:1)

「(前略) 詩的ナル方法ニテ 翻訳スルニヨリ, 十分雅致アル陳述ニテ導キヌ. コノ作品ヲ彼ハカクモ明白ニ, カツカクモ優雅ニ彼ノ言語ノ特有語法ニ従イテ書キ上ゲタル結果, 聞キテ解スル者達ニツノ優美ノ少ナカラヌ魅力ヲ与エオリ。」 (高橋 (2003:7))

23 Vgl. Sievers (1878), Piper (1897), and Huber (1969).

*tharod, || that he thar gimanodi | manno gehuiliken || thero hōbidscatto, | the
thither that he there tell.SUBJ.3SG.PST of_men each of_the poll_taxes that
sie te themu hōbe scoldin || tinsi gelden: | 'nis thes tueho ênig ||
they to the court should.SUBJ.3PL.PST duty pay is_not of_the doubt any
gumono nigîenumu, | ne sie ina fargelden sân || mêđmo kusteon, |
men's none not they him pay.SUBJ.3PL.PRS soon of_valuables of_the_finet
biûten iuuue mêster êno || habad it farlâten. [...]* (3185b-93a)
except your man alone has it left

（「彼〔＝王の傲慢な臣下〕はそれからシモン・ペトルスに話しかけ、言ったことには、彼はこちらへそれぞれの男に人頭税について、その税を払いに宮廷に向かわねばならぬ旨を言い、送られたと言うことであった。『いかなる者にも一切の疑いはないのだ、すぐに彼らが彼〔＝王〕に金品を払うことに、あなたの師のみを残して。（後略）』」）

『タツィアーン』：‘Et cum uenissent capharnaum accesserunt qui didragma accipiebant ad petrum & dixerunt. magister uester non soluit didragma.’

(Masser 1994:35)

（「そして彼らがカパナウムに来たとき、税を受け取る者達がペテロの方へとやって来て、〔彼に〕こう言った、（『あなたの師〔＝キリスト〕は銀貨を払わないのか（』と）。』）

ラバヌス・マウルス：‘Post Augustum Caesarem Judaea est facta tributaria, et omnes censi capite ferebantur. Unde et Joseph cum Maria cognata sua profectus est in Bethleem. [...] malitiose interrogant, utrum reddat tributa an contradicat Caesaris voluntati, [...]’ (Migne 1864:1005A)

（「アウグストゥス・カエサルにより、ユダヤ人は属し、全ての者に人頭税がかかった。そこで、ヨセフは配偶者マリアを伴い、ベツレヘムへ向かった。（中略）彼らは悪意を持って、彼に納税するかカエサルの命に背くかを尋ねた。（後略）』）

- b. *Listiun talde thō || the aldo man an them alaha | idis thero gōdun, || sagda
of wisdom said then the old man in the temple to lady the good said
sōðlico, | huō iro sunu scolda || oðar thesan middilgard | managun uuerðan ||
verily how himself son should over this earth many.DAT become
sumun te falle, sumun te frōbru | firiho barnun, || them liudiun te leoba, |
some.DAT as fall some.DAT as help people's child the people.DAT as love*

the is lèrun gihòrdin, || endi them te harma, | the hòrien ni uueldin ||
 who his teaching hear.3PL.SUBJ.PST and the.DAT as harm who hear not would
Kristas lèron. | ‘Thu scalt noh’, quað he, ‘cara thiggean, || harm an thinumu herton, |
 Christ’s teaching you shall also said he sorrow get harm in your heart
than ina heliðo barn || uuâpnun uuítnod. | That uuirðid thi uuerk mikil, ||
 when him men’s child with weapons (they) kill that becomes to you work great
thrim te githolonna.’ (492b–502a)
 grief to endure

(「賢くもその老人はその時言った、寺院において、その良き女性に、言ったのだ、如何〔なる存在〕にまさにその子がこの地上で、多くの者にとって、なるのかを、ある者には墮落に、ある者には人々の子の助けに、彼の教えを聞く者には恩恵に、キリストの教えを聞かない者には災厄に〔なるということ〕。『あなたはまた』と彼は言った、『苛むであろう、心に傷を受けるであろう、彼らが人々の子を武器で以て殺すときに。そのことはあなたにとって、耐えるべき大いなる悲しみとなる。』)

『タツィアーン』: ‘benedixit illis simeon.’ / & dixit ad mariani matrem eius, / ecce positus est hie In ruina. / & resurrectionem multorum In israhel. / & in signum cui contradic&ur,’ (Masser 1994:91)

(「シメオンは彼らを祝福した。そして、彼の母たるマリアに言った。(『見よ、この子はイスラエルにおける多くの者の墮落と復活のために定められている、そして、反対されることになる印のために。』)

ベーダ: ‘in resurrectionem quia lumen est, quia gloria plebis Israel, quia dicit: Ego sum resurrectio et vita: qui credit in me, etiamsi mortuus fuerit, vivet, et omnis qui vivit et credit in me, non morietur in aeternum’

(Migne 1862:0346A)

(「復活において、彼は光であるために、彼はイスラエルの民の栄光であるために、〔そして〕彼が〔次のように〕言ったために、『私は復活であり生である。私を信ずるものは、たとえ死ぬことになろうとも、生き続ける、そして生きて私を信ずるものは皆永遠に死ぬことはない。』と。)

(16a) に関して、『タツィアーン』では単なる直接話法が用いられ、フラバヌスの注釈も「新約聖書」における人頭税の記述に触れているものである。また、(16b)についても、『タツィアーン』では同様に単なる直接話法が用いられているに過ぎず、ベ

一ダの注釈もキリストとその復活に関する説明を加えるものである。従って、これらの例のいずれにおいても、ラテン語『タツィアーン』ならびに中世の神学者の注釈は、『ヘーリアント』における話法の移行をその作者が使用するにあたって、影響を与えているとは考えられない。

以上より、本論が扱った話法の移行というのは、作者が自由裁量で使用するものできたものであり、いわば作者の文体²⁴が現れているものとして考えるのが適切であろう。なお、Russom (1998: 138) は「直接話法への移行は、口頭での実演の際に、身振りや語調で示されていたかもしれない(“Transitions to direct discourse [...] may have been indicated during oral performance by gesture or intonation”）」という考えを示しているが、これについてはいささか疑わしい。Russom もその可能性を示したに過ぎないが、仮にそのような「身振りや語調で」直接話法の再現部を示すことができたとしても、導入部や間接話法を伴わない、直接話法の再現部が単体で現れる例(自由直接話法のもの)は古ザクセン語聖書詩において一切見出されない。従って、その存在を想定しても、あくまでも「身振りや語調」は補助的なものに過ぎないものでしかなかったと言わざるを得ない。

6. 結び

本論の考察により、古ザクセン語聖書詩における話法について次のことが明らかとなった。まず、直接話法の再現部には、*kwap* ないしは非 *kwap* 型の導入部の他に、間接的な話法がその導入部に類するものとして伴われるのみならず、少なくともこれら三つのいずれかが必ず必要となるという点である。逆に言えば、導入部の欠如した直接話法の再現部単体(自由直接話法)は、古ザクセン語聖書詩には一切用いられないと言う事実である。従来は、『ヘーリアント』において話法の移行があることは知られていたものの、これらの導入部ないしは間接的な話法が、直接話法の再現部が現

24 〈文体〉については、例えば次の定義を参照されたい。

Le style est l'aspect de l'énoncé qui résulte du choix des moyens d'expression déterminé par la nature et les intentions du sujet parlant ou écrivant. (Guiraud 1979: 120)
(「文体というものは、話し手ないしは書き手の天性及び意図によって決定される表現方法の選択の結果であるような、言説の様相である。」)

古ザクセン聖書詩の作家の文体は、作者が本稿で取り扱っている移行をその選択肢として持ち、それを利用することで部分的に形成されていると考えられる。

れる際に、全て欠けることが可能であるかについては明らかではなかった。これは話法の移行として本稿が扱ったものは、現代語の観点からは不規則なもののように思える一方で、間接的な話法を非 *kwap* 型導入部に類似するものと考え、ある種の導入部の役割を果たすものと見なすことにより、あくまでも間接的な話法には直接話法の再現部を導入する機能があるという見方を提供することになることが示された。また、話法の移行に関して、従来対象とされることのなかった古ザクセン語『創世記』においても、同様の状況であることが確認された。加えて、とりわけ『ヘーリアント』に関して、比較的自由ではあるものの翻訳文献であることが知られているにも拘らず、話法の移行がその原典と考えられるラテン語『タツィアーン』ないしは中世の神学者らの注釈の影響を受けているかについては、さほど注目されていなかったが、本稿で触れたようにそれらのいずれの影響も見受け難かった。従って、『ヘーリアント』に限らず、古ザクセン語聖書詩全体について、作者の自由裁量によって話法の移行が選択されていると考えることが妥当であると結論づける。今後は、こうした話法の移行が用いられている箇所と、直接話法が単体で用いられている箇所、あるいは話法の移行を伴わない間接的な話法が用いられている箇所について、厳密に比較検討を行った上で、両者の間にどのような文体的な差異が見られるかを考察することが求められよう。

参考文献

- Behaghel, Otto (1876): *Die Modi im Heliand: ein Versuch auf dem Gebiete der Syntax*. Paderborn: Druck und Verlag von Ferdinand Schöningh.
- (1897): *Die Syntax des Heliand*. Wien: F. Tempsky.
- Behaghel, Otto / Taeger, Burkhard (Hrsg.) (1996): *Heliand und Genesis*, hrsg. von Otto Behaghel, 10., überarbeitete Aufl. von Burkhard Taeger. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Berron, Gottfried (1939): *Studien zum Heliand als Kunstwerk*. Doktorat Dissertation, Univesität zu Tübingen. Würzburg-Aumühle: Konrad Triltsch Verlag.
- Comrie, Bernard / Haspelmath, Martin / Bickel, Balthasar (eds.) (2015): 'Leipzig Glossing Rules: Conventions for Interlinear Morpheme-by-morpheme Glosses,' revised version.
- Dittmer, Arne / Ernst Dittmer (1998) *Studien zur Wortstellung — Satzgliedstellung in der althochdeutschen Tatianübersetzung*, für den Druck bearbeitet von Michael

- Flöer und Juliane Klempt. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Guiraud, Pierre (1979) *La stylistique*, 9e édition. Paris: Presses Universitaires de France.
- Heusler, Andreas (1902): „Der dialog in der altgermanischen erzählenden dichtung.“
ZfdA 46:189–284.
- Hofmann, Dirtrich (1991): *Die Versstrukturen der altsächsischen Stabreimdichte Heliand und Genesis*, 2 Bde. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Holthausen, Ferdinand (1921): *Altsächsisches Elementarbuch*, 2., verbesserte Aufl. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.
- Institut russkogo jazyka (1980) *Russkaja grammatika*, tom II, *Sintaksis*. Moskow: Nauka.
- Leech, Geoffrey / Short, Mick (2013): *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, 2nd ed. London/New York: Routledge.
- Masser, Achim (Hrsg.) (1994): *Die lateinisch-althochdeutsche Tatianbilingue: Stiftsbibliothek St. Gallen Cod. 56*, unter Mitarbeit von E. De Felip-Jaud. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Migne, Jacques Paul (ed.) (1862): *Venerabilis Bedæ, anglo-saxonis presbyteri. Opera omnia. Tomus tertius* (Patrologiæ Latinæ; XCII). Paris: J. P. Migne. Available at: <https://www.mlat.uzh.ch>
- (1863): *B. Flacci Albini seu Alcuini abbatis et caroli magni imperatoris magistri. Opera omnia. Tomus primus* (Patrologiæ Latinæ; C). Paris: J. P. Migne. Available at: <https://www.mlat.uzh.ch>
- (1864): *B. Rabani Mauri Fuldensis abbatis et moguntini archiepiscopi. Opera omnia. Tomus primus* (Patrologiæ Latinæ; CVII). Paris: J. P. Migne. Available at: <https://www.mlat.uzh.ch>
- Piper, Paul (Hrsg.) (1897): *Die altsächsische Bibeldichtung (Heliand und Genesis)*, 1. T.: Text. Stuttgart: J. G. Cott.
- Quirk, Randolph / Greenbaum, Sidney / Leech, Geoffrey / Svartvik, Jan (1985): *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London/New York: Longman.
- Russom, Geoffrey (1998) *Beowulf and Old Germanic Metre*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sanders, Willy (2000) „Die Textsorten des Altniederdeutschen (Altsächsischen).“ *Sprach-geschichte: Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*, 2., vollständig neu bearbeitete und erweiterte Aufl., hrsg. von Werner

- Besch, Anne Betten, Oskar Reichmann und Stefan Sonderegger, 2. T., S. 1276–82.
Berlin / New York: Walter de Gruyter.
- Sehrt, Edward H. (1966): *Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis*, 2., durchges. Aufl. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Sievers, Eduard (1878): *Heliand*. Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses.
- Suzuki, Seiichi (2004): *The Metre of Old Saxon Poetry: The Remaking of Alliterative Tradition*. Cambridge/Rochester: D. S. Brewer.
- Tiefenbach, Heinrich (2010): *Altsächsisches Handwörterbuch / A Concise Old Saxon Dictionary*. Berlin / New York: De Gruyter.
- Vilmar, A. S. C. (1845): *Deutsche altertümer im Héliand als einkleidung der evangelischen geschichte: beiträge zur erklärung des altsächsischen Héliand und zur innern geschichte der einföhrung des Christentums in Deutschland*. Marburg: [s.n.].
- Widmer, Paul (2005): „Formen und Funktionen des Übergangs von indirekter Rede in direkte Rede im altsächsischen Heliand.“ *Le slipping dans les langues médiévales*, edited by Jürg Rainer Schwyter, Erich Poppe, and Sandrine Onillon, S. 57–79. Lausanne: Université de Lausanne.
- Wolf, Alois (1995): *Heldensage und Epos: zur Konstituierung einer mittelalterlichen volkssprach-lichen Gattung im Spannungsfeld von Mündlichkeit und Schriftlichkeit*. Tübingen: Gunter Narr.
- Wöllstein, Angelika / Dudenredaktion (eds.) (2016) *Duden: Die Grammatik, unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 9., vollständig überarbeitete und aktualisierte Aufl. Berlin: Dudenverlag.
- アロット, ニコラス (2014): 『語用論キーターム事典』 今井邦彦監訳. 東京: 開拓社.
[Allot, Nicholas (2010): *Key Terms in Pragmatics*. London/New York: Continuum.]
- 石川光庸 (2002): 『古ザクセン語ヘーリアント (救世主)』 東京: 大学書林.
- 鈴木康志 (2005): 『体験話法』 東京: 大学書林.
- 高橋輝和 (1994): 『古期ドイツ語文法』 東京: 大学書林.
- (2003): 『古期ドイツ語作品集』 広島: 溪水社.
- リーチ, ジェフリー・N / ショート, マイケル・H (2003): 『小説の文体: 英米小説への言語学的アプローチ』 笥壽雄監修, 石川慎一郎/瀬良晴子/廣野由美子訳. 東京: 研究社.

付録 1

i. 類型 A の開始行

141b, 216b, 222a, 226a, 259a, 271b, 283b, 563b, 825b, 915b, 956b, 1064b, 1068a, 1084b, 1092b, 1336a, 1588a, 1597b, 2025a, 2104b, 2325b, 2388a, 2419b, 2432b, 2561a, 2581b, 2652b, 2934b, 3013b, 3052a, 3062a, 3095b, 3100a, 3258a, 3278a, 3307b, 3313b, 3376a, 3520b, 3573b, 3691a, 3728a, 3801a, 3868b, 3884b, 3892b, 3913a, 3933a, 3944a, 3948b, 3987b, 3994b, 4030b, 4040b, 4061b, 4080a, 4086b, 4092b, 4138b, 4192b, 4280a, 4286b, 4296a, 4392a, 4403a, 4409a, 4432a, 4436a, 4457b, 4484b, 4508b, 4511b, 4516b, 4560b, 4572b, 4605b, 4638a, 4675b, 4689a, 4696a, 4723a, 4760b, 4777a, 4793b, 4805a, 4819b, 4861a, 4904b, 4957b, 4968b, 5152b, 5193b, 5207b, 5211b, 5218b, 5314b, 5350a, 5358b, 5573a, 5583b, 5590b, 5603b, 5635b, 5654b, 5967b, 5968a; G. 37b, G. 43a, G. 70b, G. 177b, G. 191a, G. 207a, G. 213a, G. 226a, G. 240a.

ii. 類型 A' の開始行

275a, 821a, 919b, 931a, 971a, 1131a, 1389a, 2550a, 3000a, 3024a, 3042b, 3057a, 3243a, 3249a, 3262a, 4609b, 4835b, 5089b, 5558b, 5614b, 5751b, 5883b, 5953b; G. 168a.

付録2：類型Bの出現箇所と詳細

開始行	直接話法の再現部 開始部分	先行する間接話法の 発話動詞	発話者
116b	新たな文	<i>hiet</i> 「命じた」	<i>engil godes</i> 「神の天使」
397b	新たな文	<i>hêt</i> 「命じた」	<i>godes engil</i> 「神の天使」
418a	新たな文	<i>hòrdun</i> 「聞いた」	「神の天使」
499b	新たな文	<i>sagda</i> 「言った」	「シメオン」
878a	前の節に従属する 接続詞 <i>that</i> 節	<i>cûðda</i> 「告知した」	「ヨハネ」
912a	前の節に先行詞を有す る関係詞 <i>that</i> 節	<i>frâgodun</i> 「尋ねた」	<i>Iudeo liudio</i> 「ユダヤの人々」
975a	新たな文	<i>gibòd</i> 「命じた」	「キリスト」
997b	新たな文	<i>gideda</i> [...] <i>mâri</i> 「知らせた」	「ヨハネ」
1845b	新たな文	<i>gebòd</i> 「命じた」	「キリスト」
2253a	新たな文	<i>hiet</i> 「命じた」	「キリスト」
3038b	新たな文	<i>grôtte</i> 「言った」	「キリスト」
3442b	新たな文	<i>quat</i> 「言った」	<i>thie hêrosto</i> <i>thes hîuuiskes</i> 「血筋で至高の者」
3726b	新たな文	<i>bâdun</i> 「乞うた」	<i>dolmôde</i> 「賢くない者」
3771a	新たな文 (後の節に従属する 接続詞 <i>ef</i> 「もし」節)	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」
3850a	新たな文	<i>frâgon</i> 「尋ねた」	「ユダヤ人」
3931a	前の節に従属する 接続詞 <i>nu</i> 「から」節	<i>quâðun</i> 「言った」	<i>thea liudi</i> 「民衆」
3978b	前の節と並列される 接続詞 <i>ac</i> 「しかし」節	<i>quað</i> 「言った」	‘ <i>Christ</i> ’
4419b	副詞 <i>nu</i> 「さて」で 始まる新たな文	<i>sagad</i> 「言った」	<i>uualdand</i> 「統治者 [=神]」
4481b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	「ユダヤ人」

4884b	新たな文 (後の節に従属する 接続詞 <i>ef</i> 「もし」節)	<i>hêt</i> 「命じた」	<i>that barn godes</i> 「神の子」
4964a	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	<i>Simon Petrus</i>
4973a	新たな文	<i>frâgodun</i> 「尋ねた」	<i>niðhuata</i> ‘the hostile’
5342a	新たな文	<i>frâgoda</i> 「尋ねた」	<i>thie heritogo</i> 「統治者」
5478b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	<i>thegan kêsures</i> 「皇帝の従者」
5483b	新たな文	<i>hiet</i> 「命じた」	<i>barno that besta</i> 「至高の子」 〔=キリスト〕
5520b	新たな文	<i>quâðun</i> 「言った」	<i>heriscipi Iudeono</i> ‘the Jewish people’
5542b	前の節に従属する 接続詞 <i>huand</i> 「から」 節	<i>bad</i> 「乞うた」	<i>that barn godes</i> 「神の子」
5934b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	「マグダラの マリア」
5965a	新たな文	<i>frâgoda</i> 「尋ねた」	<i>godes suno</i> 「神の子」
G. 58b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	<i>Kain</i>
G. 219b	新たな文 (後の節に従属する 接続詞 <i>ef</i> 「もし」節)	<i>gisagda</i> 「言った」	<i>Abraham</i>

付録3：類型 B' の出現箇所と詳細

開始行	直接話法の再現部 開始部分	先行する間接話法の 発話動詞	発話者
165b	前の節に従属する 接続詞 <i>ér than</i> 「まで」節	<i>skerida</i> 「命じた」	<i>hebancunninges bodon</i> 「天上の王の使者」
211b	新たな文	<i>frågode</i> 「尋ねた」	<i>ên gifrôdot man</i> 「老成した男」
521b	副詞 <i>nu</i> 「さて」で 始まる新たな文	<i>quað</i> 「言った」	「アンナ」
554b	前の節と並列される 接続詞 <i>huueder</i> 「或いは」 節	<i>frågoda</i> 「尋ねた」	「ヘロデ」
621b	新たな文	<i>quâðun</i> 「言った」	<i>that folc</i> 「民衆」
704b	副詞 <i>nu</i> 「さて」で 始まる新たな文	<i>sagde</i> 「言った」	<i>godes engil</i> 「神の天使」
724b	前の節に従属する 接続詞 <i>nu</i> 「から」節	<i>quað</i> 「言った」	「ヘロデ」
1102b	前の節に従属する 接続詞 <i>ef</i> 「もし」節	<i>quað</i> 「言った」	<i>the fiund</i> 「敵」
1112b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	<i>allaro barno bezt</i> 「最良の子」
1141b	副詞 <i>nu</i> 「さて」で 始まる新たな文	<i>hêt</i> 「命じた」	「キリスト」
1159b	新たな文 (後の節に従属する 接続詞 <i>al so</i> 「ように」節)	<i>hêt</i> 「命じた」	<i>friðubarn godes</i> 「神の平和の子 〔=キリスト〕」
1302b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」
1305b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>thie</i> 節	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」
1307b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>thie</i> 節	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」
1317a	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>thie</i> 節	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」

1321b	前の節と並列される 接続詞 <i>endi</i> 「そして」 節	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」
2052b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	<i>the hêrost</i> 「指導者」
2097b	前の節に従属する 接続詞 <i>sô</i> 「ように」 節	<i>quað</i> 「言った」	<i>ên hunno</i> 「百人隊隊長」
2129b	副詞 <i>nu</i> 「さて」 で 始まる新たな文	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」
2195b	新たな文	<i>hêt</i> 「命じた」	<i>the godes sunu</i> 「神の子」
2249b	前の節と並列される 接続詞 <i>eftha</i> 「あるいは」 節	<i>bâdun</i> 「乞うた」	<i>landes uuard</i> 「国の守護者」
2556b	新たな文	<i>quat</i> 「言った」	<i>fjond</i> 「敵」
2626b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	<i>sunu drohtines</i> 「統治者の息子」
2714b	新たな文 (後の文に従属する 接続詞 <i>ef</i> 「もし」 節)	<i>quað</i> 「言った」	「ヨハネ」
2750b	新たな文	<i>bad</i> 「乞うた」	<i>landes hirdi</i> 「国の守護者」
2823b	新たな文	<i>quâðun</i> 「言った」	<i>gesîðos tuelbi</i> 「十二使徒」
2829b	前の節に従属する 接続詞 <i>that</i> 節	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」
2833b	前の節と並列される 接続詞 <i>thôh</i> 「しかし」 節	<i>quað</i> 「言った」	<i>Philippus</i>
2844b	前の節に従属する 接続詞 <i>biûtan</i> 「を除いて」 節	<i>sagde</i> 「言った」	<i>Andreas</i>
2881a	新たな文 (後の節に従属する 接続詞 <i>nu</i> 「今や」 節)	<i>gisprâkun</i> 「話した」	<i>alle</i> 「皆」
2927b	副詞 <i>nu</i> 「さて」 で 始まる新たな文	<i>sagde</i> 「言った」	<i>hêlag hebancunning</i> 「聖なる天上の王」
2952b	新たな文	<i>frâgode</i> 「尋ねた」	<i>thiodo drohtin</i> 「民衆の指導者」

2989a	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	「カナンからの 高貴な女性」
3149b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>an themu</i> 節	<i>sagde</i> 「言った」	<i>hêlag stimne godes</i> 「神の聖なる声」
3157b	新たな文	<i>hêt</i> 「命じた」	<i>hêleandero bezt</i> 「最良の救世主」
3166b	前の節に従属する 接続詞 <i>êr than</i> 「まで」 節	<i>gibôd</i> 「命じた」	<i>the hêlago Crist</i> 「聖なるキリスト」
3190b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	<i>ênan kuninges thegan</i> 「王の従者」
3299a	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	「キリスト」
3328b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>the</i> 節	<i>quað</i> 「言った」	<i>allaro barno bezt</i> 「最良の子」
3390b	前の節に従属する 接続詞 <i>that</i> 節	<i>bâd</i> 「乞うた」	<i>the erl</i> 「その男」
3399b	新たな文 (後の文に従属する 接続詞 <i>ef</i> 「もし」 節)	<i>quað</i> 「言った」	<i>Abraham</i>
3413b	前の節と並列される 接続詞 <i>endi</i> 「そして」 節	<i>quað</i> 「言った」	<i>allaro barno bezt</i> 「最良の子」
3522b	新たな文	<i>quað</i> 「言った」	<i>mahtig</i> 「力ある 〔キリスト〕」
3563a	新たな文	<i>bâdun</i> 「乞うた」	「二人の盲目な男」
3743a	前の節と並列される 接続詞 <i>endi</i> 「そして」 節	<i>quað</i> 「言った」	「神の子」
3828b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>thes</i> 節	<i>quaðun</i> 「言った」	「ユダヤ人」
4006b	新たな文	<i>sagda</i> 「言った」	<i>hêlag Crist</i> 「聖なるキリスト」
4055b	新たな文	<i>sagde</i> 「言った」	<i>rikeo Crist</i> 「力あるキリスト」
4473b	前の節に従属する 接続詞 <i>that</i> 節	<i>quaðun</i> 「言った」	<i>êosagon</i> 「法律家たち」
4705a	新たな文	<i>hiet</i> 「命じた」	<i>uualdand</i> 「統治者」

4841b	前の節に従属する 接続詞 <i>so</i> 「ように」節	<i>fragn</i> 「尋ねる」	「キリスト」
4844b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>the</i> 節	<i>quâðun</i> 「言った」	<i>thiu menegi</i> 「群衆」
4983b	前の節に先行詞を有する 関係副詞 <i>thar</i> 節	<i>quað</i> 「言った」	<i>thes mannes</i> <i>mâguuini</i> 「男の親族」
5086b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>thes</i> 節	<i>bad</i> 「乞うた」	<i>baluhugtig [...]</i> <i>biscop</i> 「悪意に満ちた 高位聖職者」
5182b	新たな文	<i>frâgon</i> 「尋ねた」	<i>Pilatus</i>
5184b	新たな文	<i>quâðun</i> 「言った」	「ユダヤ人」
5240b	前の節と並列される 接続詞 <i>endi</i> 「そして」節	<i>quaðun</i> 「言った」	<i>Iudeo liudi</i> 「ユダヤ人」
5376b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>thie</i> 節	<i>quaðun</i> 「言った」	「ユダヤ人」
5412b	前の節に先行詞を有する 関係詞 <i>thia</i> 節	<i>frâgoian</i> 「尋ねた」	<i>thie heritogo</i> 「統治者」
5818b	新たな文	<i>hiet</i> 「命じた」	<i>thie godes engil</i> 「神の天使」
5851b	副詞 <i>nu</i> 「さて」で 始まる新たな文	<i>frâgodun</i> 「尋ねた」	<i>uualdandes bodun</i> 「統治者の使者」
5923b	新たな文 (後の文に従属する 接続詞 <i>ef</i> 「もし」節)	<i>quað</i> 「言った」	<i>Maria [...]</i> <i>Magdalen</i> 「マグダラの マリア」

付録 4 : 類型 C の出現箇所と詳細

開始行	直接話法の再現部 開始部分	先行する NRSA の 発話動詞	発話者
318b	新たな文	<i>hêt</i> 「命じた」	<i>drohtines engil</i> 「統治者の天使」
771b	副詞 <i>nu</i> 「さて」で 始まる新たな文	<i>hêt</i> 「命じた」	<i>godes engil</i> 「神の天使」
3202b	新たな文	<i>hêt</i> 「命じた」	「キリスト」
4533b	新たな文 (後の文に従属する 接続詞 <i>sô</i> 「ように」節)	<i>hêt</i> 「命じた」	「キリスト」
4617b	新たな文	<i>hêt</i> 「命じた」	「キリスト」
5158a	新たな文	<i>hêtun</i> 「命じた」	<i>thiod Iudeono</i> 「ユダヤ人たち」

付録 5 : 類型 C' の出現箇所と詳細

開始行	直接話法の再現部 開始部分	先行する NRSA の 発話動詞	発話者
3820b	前の節に先行詞 を有する 関係詞 <i>the</i> 節	<i>hêt</i> 「命じた」	「キリスト」
5330b	新たな文	<i>hietun</i> 「命じた」	<i>folc Iudeono</i> 「ユダヤ人」
5838b	前の節に先行詞 を有する 関係副詞 <i>thar</i> 節	<i>hiet</i> 「命じた」	<i>Simon</i> <i>Petruse</i>

付録 6：類型 D の出現箇所と詳細

直接語法の再現部		発話者
開始行	開始部分	
480b	副詞 <i>nu</i> 「さて」で 始まる新たな文	「シメオン」
3018a	新たな文	<i>that uuif</i> 「その女性」
3224b	新たな文	<i>the hêlago Crist</i> 「聖なるキリスト」
3281b	新たな文	「キリスト」
3365a	新たな文	<i>the ôdago man</i> 「豊かな男」
3436a	新たな文	<i>allon them [...], them thar quâmun at êrist tuo</i> 「そこへと初めに 来た者は皆」
3816b	新たな文	「キリスト」
3829b	新たな文	<i>the hêlago Crist</i> 「聖なるキリスト」
4045b	新たな文	「マルタ」
4150b	新たな文	<i>Kaiphaz</i> 「カヤパ」
5011b	新たな文	<i>Simon Petruse</i>
5100b	副詞 <i>nu</i> 「さて」で 始まる新たな文	<i>the biscop</i> 「司教」
5567b	新たな文	<i>thia liudin</i> 「人々」